

描かれなない風景

——『更級日記』小見——

(一)

『更級日記』の文章表現には、他の王朝女流日記や物語などに比べて、きわめて特異なものが存しているように思われる。それらの一端については、かつてその上洛途次の紀行の文言に即して述べたことがある。^(注1)以下に述べようとするのも、やはり右に言う紀行の特異な文言に関する。当該の文言には、あつてしかるべき描写が欠落しているように思われ、小論は、その何たるかを追ひ尋ねることに主眼を置くが、その問掛けはさらになぜそのような欠落があるのかというアポリアを当然のことながら導く。後者についての解答をなし得る段階にはないが、前者の指摘それ自体にそれなりの意義があるろうかと思われるので、問題提起の意をも含め私見を述べてみたいと思う。

高橋文二

著者、菅原孝標女は、受領としての四ヶ年の勤めを終えて帰洛しようとする父に伴われて、今まさに京に入ろうとして逢坂の関のあたりにやって来ていた。既に三月にわたる旅程を経て、この日の夜には京に至り着こうとしていたのである。

このあたりの記述は、こんな具合になっている。

粟津にとどまりて、十二月の二日、京に入る。暗く行き着くべくと、申の時ばかりに立ちて行けば、関近くなりて、山づらにかりそめなる切懸といふものしたる上より、丈六の仏の、いまだ荒造りにおはするが、顔ばかり見やられたり。あはれに、人はなれていづこともなくておはする仏かなと、うち見やりて過ぎぬ。

ここのら^{ここのら}の国々を過ぎぬるに、駿河の清見が関と、逢坂の関とばかりはなかりけり。いと暗くなりて、三条の宮の西なる所に着きぬ。

特異な文言とは、右の文の終り近くの傍線部の意味する事柄に関

る。「たくさんの国々を過ぎてきたが、駿河の清見が関と逢坂の関ほど、景色のすばらしく心に残る所はなかった」といった程度に口語訳できるところであり、目に触れた諸注釈の解釈にも異論はない。引用文の終り近くの「……ばかりはなかりけり」のところを「……ほど景色のよいところはなかった」（新潮古典集成本）とか、「……ぐらい、しみじみと心に残るところはなかった」（小学館日本古典文学全集）と口語訳する程度の違いで、右の文言を感動の表現として受け取っていることには変りがない。

わざわざ夜になるのを待って京の街中に入ってゆくということ、知られるように『土佐日記』の終末部、承平五年二月十六日の記事にもあり、おそらくは長途の疲れ、むさくるしさを見せぬための配慮であつたらうと推測されるが、その理由はともかく作者たち一行は「暗く行き着くべく」時間を調節して逢坂山を越えつつあつた。

季節は冬の最中、時間は、申の時（午後三時頃から五時頃までの間）ばかりに栗津のあたりを出立した、というのであるから、逢坂の関あたりに来た頃には、暮れなずむ頃となっていたであろう。

栗津とは琵琶湖の南端、瀬田川の河口の西側の湖岸のあたり、現在の京阪石山線の栗津と膳所に挟まれたあたりの地を言うが、仮に孝標女たちの一行が出立した地がその中ほどであるとすれば、関寺の地、つまり現在の長安寺のあるあたりまでは一里（四キロ）の距離もない。一時間半もあれば、ゆっくりと歩む行列であっても、関寺のあたりに行き着いているであろう。

冬の日暮れやすい。しかし、「丈六の仏の、いまだ荒造りにおはするが、顔ばかり見やられたり」と記しているのだから、冬のた

そがれ時とは言つても、いまだ視界は閉ざされてはいなかったことになる。そのあとのところに「あはれに、人はなれていづこともなくておはする仏かな、とうち見やりて過ぎぬ」とあるところを見ると、「あはれに」と感動を籠めたもの言いをしながらも、態々止るほどの心残りもなく通り過ぎて行ったようにも思われる。

右のごとき路程を経たあとに、作者は先にも触れたようにこんなことを記す。

ここの国々を過ぎぬるに、駿河の清見が関と、逢坂の関とばかりはなかりけり。

この記述が私には少しく気にかかる。清見が関がすばらしかったことは本文中の記述によってよく判る。しかし、逢坂の関がさほどにすばらしかったとは——先刻の記述だけではどうも落ち着かぬ。そこでもう一度近くの注釈書を繙いてみたが、どれも特別の注意を払っていない。

丈六の仏の荒造りのままに「人はなれていづこともなくておはする」のがさほどに感動的な景觀だとは思われない。表には描かれないう冬景色が作者の心を捉えていたのだろうか。三河の宮路の山を越えた十月のつごもりにはまだ紅葉が盛んであつたと記していたが、それから一ヶ月も経っている時に逢坂山の紅葉が残っているはずもない。『石山寺縁起』の巻三には藤原道長の姉の東三条院が石山詣の途次、秋（長保三年の九月）の逢坂山を行列を連ねて越えて行くところが描かれているが、行列の前景の山々の常緑樹のあいまには既に紅葉のあざやかな朱が点じられている。「源氏物語絵巻」の逢坂越えの場面（「関屋」）も、詞書の『源氏物語』の本文に

九月のつごもりなれば、紅葉のいろいろこきませ、しもがれのくさ、むら／＼にかしくみえわたるに……

とあるように、九月末のことであり、もとより当り前のことだが、紅葉の盛りであり、既に霜枯れの季節でもあった。作者の見た逢坂の関あたりの十二月初めの景観は、常緑樹のあいまにとうに葉を落した冬枯れの木々を点綴する殺風景な景観であったように思われ、清見が関に匹敵するほどの美景であったとは思われない。

もちろん、風景の美とは、なかばは心境の問題でもあるから、作者の関という特別な境界を越え、京への到着を真近にした旅の心が昂揚のうちにあつて特別なものを感じたとも考えられる。風の音一つにも特別な感慨を催すということもあり得る。

事実、後年(寛徳二年、西暦一〇四五年)、作者三十八歳の十一月二十余日の石山詣の記述には

雪うち降りつつ、道のほどさへをかしきに、逢坂の関を見るにも、昔越えしも冬ぞかしと思ひ出でらるるに、そのほどしも、いと荒う吹いたり。

逢坂の関のせき風吹く声は昔聞きしに交らざりけり

関寺のいかめしう造られたるを見るにも、その折、荒造りの御顔ばかり見られし折思ひ出でられて、年月の過ぎにけるもいとあはれなり。

とあり、風の音に二十四年も前になった上洛の折の逢坂越を思い出している。こういうことを思うと、先に掲げた上洛の折の記述の中に、風の音に感慨を催しつつ関を越えて行く作者の姿を思い見ることも不可能ではない。

しかし、作者は、そのようなことを記しはしなかった。しかも上洛の折には、石山詣の折とは異なって、雪が降っていたけいもない。石山詣の折には「雪うち降りつつ」、それゆえに「道のほどさへをかし」かったと言っているが、その雪も降っていない。清見が関の感動と相並ぶほどの感動がそこに生れたとはいかにも考えにくい。事実、先にも述べてきたように、感動のさしたる表現もそこにはない。やはり奇妙な感じがする。

(二)

もつとも清見が関の描写とても、例えば足柄山での遊女との出会いと別れを語った場面などに比べれば、「おもしろきことかぎりなし」などという感動の表現はあるものの、描写の内実はさしたることもない。

清見が関は、片つ方は海なるに、関屋どもあまたありて、海まで釘貫くぎぬきしたり。けぶりあふにやあらむ。清見が関の波も高くなりぬべし。おもしろきことかぎりなし。

「けぶりあふにやあらむ」の意が諸注も言うようによく判らないが、関屋と海浜の光景が作者の心を感動させていることは明らかである。

作者はこういった海景に何度も心を捉れている。しかもその折の感動の表現がしばしば「おもしろし」という形容詞をもつてなされていることも興趣をそそる。逢坂の関の場面には「おもしろし」という感動の表現はないが、清見が関と匹敵するものとして思い起こ

されていることは、ここにもその言葉によって形容されてもよいような景観が括っていたのではないか、という思いを起こさせる。

この日記の中には「おもしろし」という言葉が十二回使われており、その活用形の内訳は「おもしろく」(連用形)が三箇所、「おもしろし」(終止形)が五箇所、「おもしろき」(連体形)が四箇所であるが、文字通りおもしろいことは、終止形の「おもしろし」の使われている対象がすべて括がりのある海と湖の景観であるということである。念のために左にそれら六例を掲げてみよう。

- (1) 東西は海近くて、いとおもしろし。(出立直後の「門出したる処」の描写)
- (2) 片つ方は海、浜のさまも、寄せかへる浪の景色も、いみじうおもしろし。(相模の国の「にしとみ」での描写。この少しあとに「清見が関」の場面がある)
- (3) 外の海は、いといみじくあしく浪高くて、入江のいたづらなる洲どもに、こと物もなく松原の茂れる中より、浪の寄せかへるも、色々玉のやうに見え、まことに松の末より浪は越ゆるやうに見えて、いみじくおもしろし。(「浜名の橋」の外の海の描写)
- (4) 湖の面はるばるとして、なでしま、竹生島などいふ処の見えたる、いとおもしろし。(近江の琵琶湖の描写)
- (5) またの日、山の端に日のかかるほど、住吉の浦を過ぐ。空も一つにきり渡れる、松の梢も、海の面も、浪の寄せくる渚のほども、絵にかきても及ぶべき方なうおもしろし。(後年、天喜二年の秋の頃、既に齢四十代の末にかかっていた作者が

和泉へ下った折の途次の描写)

以上の五例であるが、それらがすべて海景、湖景という作者にとって珍しい景観であり、かつ括がりのある光景だというのもおもしろい。「清見が関」の場面は「おもしろき(こと)」と連体形の形をとっているが、そのありようを「かぎりなし」として強調している。終止形で止めている右の五例の「おもしろし」も、文末に置かれ、さらに「いと」や「いみじく」に修飾されることによって詠嘆の意を一層強め、「おもしろきことかぎりなし」というありように意味的には近づいているのではないかと推測される。

因に他の七例、つまり連用形の三例と連体形の四例は、紅葉の描写に二例、桜、春霞、月、海、の描写に一例づつ(海の例は、もちろん、先に掲げた清見が関の場面)、もう一例は

めでたき事も、をかしくおもしろき折々も、わが身はかやうに立ちまじり……

といったごく抽象的な対象に用いられている(長歴四年の頃、結婚後ほどない、三十三歳頃の作者の述懐の記事)。それらは、花や紅葉の、この世ならぬ、まさに異郷的とも言ってよいすばらしさを表すの(注2)に用いられており、もとより前者の場合と意義を異にするものではないが、先にも述べたように終止形の場合にはその意味が一層強調されているように思われるのである。それは、この世ならぬとは言っても、見ることに慣れた花や紅葉への感動と、やや特殊な体験に属する海景、湖景への感動との差と言ったらいいかもしれない。

『更級日記』の中には海や湖との出会いを語った文章はきわめて少ない。先の用例の(5)に掲げた和泉へ下った折の記述のほかは皆、

少女時代の上洛の途次の記述ばかりである。とは言っても、先の(1) (4)の用例のほかにはさほどの記事があるわけでもない。一つは下総の国にまだ滞在していたときの「くろとの浜」の記事、もう一つは「田子の浦」の記事、さらに強いて探せば、尾張の「鳴海の浦」の記事ぐらいであるが、「田子の浦」の場合は、短い記事である上に、その前に「清見が関」の記述があるので「おもしろし」を重複させなかったのであろうし、「鳴海の浦」の場合は、潮が満ちてくるのを心配していて景色を賞でるところではなかったという事情が与っているであろう。「おもしろし」があってもいいと思われるのは、紙幅の関係で文の引用は控えるが、「くろとの浜」の月の夜の場面であろう。なぜないのか、という理由を強いて探せば、ここには「おもしろし」に代るに

まどろまじこよひならではいつか見むくろとの浜の秋の夜の月
という感動の表白としての歌があるからだろうと思う。もっとも後年の住吉の浦を過ぎた折の記述には「おもしろし」の詠嘆と同時にさらに

いかに言ひ何にたとへて語らまし秋の夕べの住吉の浦

という歌まであるが、ここは文章としてのバランスをやや欠いた箇所と言つてよいであろう。

この歌は少女時代の歌と少しも変らぬような稚い歌であり、「おもしろし」の意と重複した、なくもがなの歌でもあるが、しかし、ここではそういう歌であるが故にかえて「おもしろし」の評語の意味するものが、つまり「いかに言ひ何にたとへて語」ったらいのか、それが判らぬほどのすばらしさの感動と響きあうものだということ

が、自ずと証されることにもなつてゆくのである。

(三)

まあ、あまり勝手な想念の穴倉に入ってゆくようなことは止めよう。要するに何を言いたいのか。

結論的なことを先立てて言うならば、作者は日暮れどきの逢坂の関のあたりで、というより関のあたりから、「おもしろし」と評して言いような拡がりのある景観を実は見ていたのではないか、ということなのである。さらに言えば、関に至る山路を辿りながら、作者は何度も「おもしろし」と詠嘆するに適しいような景観を見ていたのではないか、ということなのである。

それは眼前の山づらあたりの冬枯れのただの景色などではなくして、もっと拡がりのある、視野の開けた景観なのではないかと私に思われるのである。

この景観を考える上で、参考になる一つの風景描写を想い起こしておきたい。

それは『蜻蛉日記』中巻に記されている唐崎祓の折の記述である。

夫兼家の夜離れにいたく苦しめられていた道綱母は天禄元年六月の二十日すぎ(既に三十代のなかばにあつたろう)、「心ものべがてら、浜づらの方に祓もせむ」と思つて琵琶湖畔の唐崎へと出発した。暁、寅の時ばかりに出立した頃にはいまだ月も明るかったが、賀茂川のあたりで夜が明ける。その後の描写はこんなふうになつて

いる。

うち過ぎて、山路になりて、京に違ひたるさまを見るにも、このごろの心地なればにやあらむ、いとあはれなり。いはむや、関にいたりて、しばし車とどめて、牛かひなどするに、空車引き続けて、あやしき木樵りおろして、いと小暗き中より来るも、心地ひきたがへたるやうにおぼえて、いとをかし。

関の山路、あはれあはれとおぼえて、行く先を見やりたれば、行方も知らず見えわたりて、鳥の二つ三つゐたると見ゆるものを、しひて思へば釣舟なるべし。そこにぞ、え涙はとどめずなりぬる。いふかひなき心だにかく思へば、ましてこと人は、あはれと泣くなり。はしたなきまでおぼゆれば、目も見合はせられず。

ここで直接に関連するのは、右の文章のなかばにある「関の山路」以下、数行の描写である。

「関にいたりて」以降の文言であるから、ここは天津に向つて既下つてゆく描写であるが、ここで作者は何を見たか——そのことが小論の文脈にも大きく関つてくるのである。

行く先を見やりたれば、行方も知らず見えわたりて、鳥の二つ三つゐたると見ゆるものを、しひて思へば釣舟なるべし。そこにぞ、え涙はとどめずなりぬる。

『蜻蛉日記』の作者道綱母は唐崎に行く途次、関の山路を辿りながら、行手はるかに拡がる湖を見、そこに浮かぶ鳥の如き釣舟を見て、あふれる涙を禁じ得なかつた。

逢坂山からのうち拡がる湖の景観はもとより古くから人々の心を

捉えていたであらう。『万葉集』の中にはそういう風景を歌ったものもある。

大和から宇治川を渡り、逢坂を越えて近江へと行く路程を歌った二つの長歌のあとに置かれた反歌（巻第十三—三三三八）に

相坂をうち出でて見れば淡海の海白木綿花に浪立ち渡る

とあることなどをここに思い起こす（相坂の表記は原文のまま）。前に置かれた二つの長歌のうち直前のものは、吾妹子に逢うべく峠の神に幣帛を手向け、「くれくれと」、つまり何か暗い気持で逢坂山を越えて行く男のことを歌っていて、それを踏まえてこの反歌を読むと、白木綿花（白い木綿の造花）のように連立つて拡がる湖面が浮かび上り、その細かな波動が、男の、孤独で暗い、しかし女に逢いたいという切実な気持（長歌の言葉で言うところ「くれくれと独ぞ我が来る妹が目を欲り」）に響きあつてゆくようである。一見明るい、そして少しも巧みでないこの歌が少しく哀切な歌のようにも感じられてくる。もっともこの歌についてはかつて小林秀雄氏が「実朝」（一九四三年）の中で、実朝の

箱根路をわれ越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄るみゆを採り上げた際に言及し、この万葉の歌が実朝の歌の本歌としてよく引き合いに出されるが、それは「短歌鑑賞上の戯れとしか思へない」と言い、さらに以下のようなよく知られた言葉を述べた。少々長いが引用してみる。

自分の心持を出来るだけ殺してみるのだが、この短調と長調とで歌はれた二つの音楽は、あんまり違つた旋律を伝へる。万葉の歌は、相坂山に木綿を手向け、女に会ひに行く古代の人の泡

立つ恋心の調べを自ら伝へてゐるが、「沖の小島に浪の寄るみゆ」といふ微妙な詞の動きには、芭蕉の所謂ほそみとまでは言はなくても、何かさういふ感じの含みがあり、耳に聞えぬ白波の碎ける音を、遙かに眼で追ひ心に聞くと言ふ様な感じが現れてゐる様に思ふ、はつきりと澄んだ姿に、何とは知れぬ哀感がある。耳を病んだ音楽家は、こんな風な姿で音楽を聞くかも知れぬ。

大きく開けた伊豆の海があり、その中に遙かに小さな島が見え、又その中に更に小さく白い波が寄せ、又その先きに自分の心の形が見えて来るといふ風に歌は動いてゐる。

小林氏のもの言いは私にもよく判る。確かに万葉の歌は実朝の歌の言葉のもつ微妙さも哀感も表面的にはもたない。歌の文学的な自立性のレベルにおいて確かに及ばない。就中、実朝の歌の末尾の「見ゆ」という言葉の内包するものは——つまり視覚的な感受のみならず、感受したゆえの感動まで包摂するありようは万葉歌の意味するものをはるかに超えている。^(注3)

しかし、そのように実朝の歌を読み解くためには、自立性が高いとは言つても、小林氏がそうしたように、やはり実朝の不安に満ちた、孤独な境涯をその歌の背後に想い見ることが必要だろう。そのことに倣つて、万葉の先の歌を、前に置かれた長歌の世界と重ねあわせて読んでゆくと、この歌もまたかならずしも明るい、言うところの長調の歌とばかりは言い切れない陰翳をも帯びてくる。「くれくれと独ぞ我が来る」逢坂山の山路がそんなに明るいはずはない。その山路がふいに開け、そのかなたに湖の面が拡がり、白木綿のよ

うな波頭が、あるいは漣立つ湖面が見える。それが視覚的に明るい、拡がりのある景観であつたとしても、それはそのまま明るい風景とは言い切れない。明るければ明るいだけ、心の彩りを宿して哀切な風景というものもまた存在する。

『蜻蛉日記』の作者の心を捉えた風景もそういうものであつたと思う。「行方も知らず見えわたりて」とあるのだから、夏の暑い陽差しのもと、視界は明るく開けていたわけだが、その景観を見、釣舟の水鳥のように浮んでいるのを見て、作者は涙を禁じ得なかつた。このところの兼家との関係の中で醸成された鬱懐がうち拡がる景観との出会いの中に奔出したのである。しかし、この奔出は苛立ちや怒りや不満のそれではない。風景は自ずと作者の鬱懐を包み込み、それは涙という浄化の一つの形をとって現れ出ている。『蜻蛉日記』の作者は唐崎祓の旅の途次、「あはれ」や「をかし」の語をしきりに使つて詠嘆を表していて、ここに「おもしろし」の形はないが、『更級日記』の作者ならば、山路からはるかに拡がる湖を見て、「おもしろし」と言うべきところだつたのではないかと思う（因に『蜻蛉日記』の中には三例の「おもしろし」が見られ、花、山寺、木立に対して使われている。さらに「おもしろ」という語幹の形もある）。

遠まわりしてあれこれ言ってきたが、言いたいことは『更級日記』の作者もまた逢坂山の山路を辿りながら、はるかに拡がる琵琶湖（当時はこういうもの言いをしないが）を眺めたのではないかということである。三ヶ月にもわたる旅の中でふくらんできた種々の思いや、今京都を目前に控えての喜びと、それゆえの興奮といった、

あふれんばかりの情感の沸き立ちが、この景観の中に奔出したに違いない。いかにも「おもしろし」と言うに適しい景観が眼下に拡がっていたのではないかと私は推測する。

もちろん、現に私たちの目にする『更級日記』の中にはそのことを記した文章はない。存在するものは

ここの国々を過ぎぬるに、駿河の清見が関と、逢坂の関とばかりはなかりけり。
という文言だけだ。

対照的に採りあげられた清見が関への贅辞、「おもしろきことかぎりなし」を想い起こし、その「おもしろし」の語がしばしば明るく開けた海景などの対象に用いられることを思ったときに、ここにも海景のごとき風景があつてしかるべきではないかと思つたのである。

季節的には既に紅葉はない。さりとて冬景色を彩る雪も降っていない。荒造りの丈六の仏も、少々の思ひは湧いたにせよ、「うち見やりて過ぎ」てしまう程度のものであった。

しかも時間的には暮色の頃である。彩りを添えるものは、日陰を深くした山並のむこう、残んの光の中にうち拡がる琵琶湖の面である。久しぶりの都にほどなく帰り着こうとしている作者の昂揚した気持の前にその景観がうち拡がっている。そこに深い感慨が生じぬはずはない。その感慨が先の文言に表われていたのだと思う。

しかし、判らぬことは、それではなぜ作者はかくも感動的な出来事を細かに記すことはせず、先の如き舌足らずな文言で収めてしまつたのかということである。このことは、もちろん、謎である。作者

の文章表現に関する不思議とでも一応は言っておくことにしよう。

(四)

右に述べてきたことに限らず、この作者の文章表現には、他の王朝作家たちの表現に比べて、特異な点がいろいろとある。

例えば、「野中に岡だちたる所に、ただ木ぞ三つ立てる」などといった眺める対象の箇数を明記する描き方。どもやなどといった概数や抽象的な表現で対象を捉えようとするありふれた王朝作家たちの表現のありかたとは明らかに違つたこういう描き方は明らかに特異である。このことについてはかつて(注1)の論の中で論じた。

あるいは説話への関心や、王朝の女流作家たちがめつたに採りあげることをしてしない事物や事態への関心。上洛の折のまの長者の事跡や竹芝寺の伝承への関心とそのことを詳細に書き留めるといふ王朝女流作家らしからぬありかたや、同じ上洛の途次、三河の国、二むらの山の中の庵に宿つた折に柿のことを記すような感受性のありかたはそのことを如実に語っているであらう。

二むらの山の中にとまりたる夜、大きな柿の木の下に庵を作
りたれば、夜一夜、庵の上に柿の落ちかかりたるを、人々拾ひ
などす。

と本文には何気なく記されているが、月並の王朝人はそもそも「柿」などというものを描こうとはしなかった。観念的な美意識の埒外で物を自然に見ようとする姿勢がそこにはある。

あるいはまた、和歌の贈答などといった王朝人の美意識が最も典

型的に表われる場にあっても、この日記の作者の描き方は時折異様である。

このことは昔から（定家の書写本にも既に疑義が投げかけられてあった）不可解なことに思われているが、長元の末年、作者二十代の末の頃の修学院に尼になって籠った「親族なる人」との贈答のありようなどをここに想い起こしてみよう。

涙さへふりはへつぞ思いやるあらし吹くらむ冬の山里

と作者は相手の苦勞を思いやって歌を詠んで遣る。季節は「冬ころ」とあるからこの歌はこれでよい。

だが、尼の返歌は

わけて問ふ心のほどの見ゆるかな木蔭をぐらき夏のしげりを

と「夏のしげり」を歌っていて異様である。月並の王朝人はこういう贈答はしない。

もちろん、返歌は作者のものではないのだから、仮に尼がこういう歌を詠んで返したというのなら現実の問題としては仕方ない。しかし、要はこういう贈答を書き留める作者の意識の問題である。対照の妙を強いて案出したのだというのも領けない。錯簡だという考えも可能ではあるが、落ち着かない。何となく雰囲気の似ている「尼なる人」との贈答が、この日記の最期にあるが、これもまた日記の閉じめとしてはいかにも落ち着かない。

これらの贈答歌の問題は作者の記述態度の特異さというよりも本文の錯簡や脱落や日記自体の中断といった事情に因っているようにも思えるが、いずれにして現今の状態のままでは異様な印象は拭いきれない。

こういった問題と先の逢坂山での問題とがもとより連関するといふわけではない。逢坂山での表現の問題はそれ自体私にとっては一つの完結したアポリアである。都を直前にした作者の、いつにない昂揚した気持の表現に過ぎないのではないか、と思おうとすれば思えぬでもない舌足らずの文言なのであるが、それではやはり清見が関と比べたことの意味がはつきりしてこない。推測に大きく傾かざるを得ない論ではあったが、『更級日記』の表現の特異さを問うための一つの視座の提起として少々の意味はあるのではないかと思うのである。

〔注1〕『更級日記』の世界——喪失感と基盤としての自然——（『国語と国文学』第五十二巻第七号、昭和五十年七月）。後に『風景と共感覚』（春秋社、昭和六十年）に収む。

〔注2〕「おもしろし」の語義に関してはかつて小論をものしたことがある。「おもしろし」の世界——王朝文学における人工楽園の構想に關連して——（『駒沢国文』第十四号、昭和五十二年三月）。後に前掲書に収む。

〔注3〕「見ゆ」の蔵する意味あいについては特に『万葉集』所載歌を軸に論じたことがある。「八見ゆの心」（『駒沢国文』第十号、昭和四十八年六月）。後に前掲書に収む。